

ノヴァリスに於ける夢の意味

朝 倉 保 平 *

Hohei ASAKURA: IDEE DES TRAUMS BEI NOVALIS

18世紀の終りから19世紀中頃近く迄ヨーロッパ全体にみなぎつた Romantik は単に文学だけでなく、宗教、哲学、科学等文化全体に亘る支配的な思潮であつた。殊に独乙はその国民性と結びついて見事な開花を示し、同時代及後代の受けた影響も深刻で、之に対する功罪の批評そのものが、亦多くの問題を提示している。とまれ、文学についてみれば、作品の上には優れたものを残したとは言ひ難いが、近代文化の上に自我を解放し芸術と学問の視野を無限に拓げた功績は大きく評価されるべきであろう。

この歴史の一時期を飾つた浪漫主義はどのような世界観を、如何なる心的機構の基音の上に展開していつたのであろうか。

世界を、吾々の感覚に現われ、吾々の悟性によつて認識される像以外の何物でもないとする絶対的实在論を根本確信とする啓蒙主義に対して、疾風怒濤運動に初まり、古典主義を通じ浪漫主義に到つて、感覚界の悟性的な解釈では到底明かにされ得ない世界の内奥の像に触れうる唯一の道は Phantasie であるとする確信が之に対立する。即ち合理主義、實在主義の束縛から自己を解放する場合にのみ吾々は世界理解の能力を獲得する。科学ではなく詩によつてのみ、物の真の本体への門が開かれる。

このような確信と実現を、浪漫主義は作品の上でどのように描いたか。彼らの世界を反映し啓示する等の文学はどのように展開したか。こゝでは Novalis の代表作であり、浪漫派の代表作の一つである Heinrich von Ofterdingen (一般には青い花の名で呼ばれているが、この呼び名は、或る意味では、浪漫主義に対する意味深き Allegorie で

もある) について、彼の(従つて浪漫主義の)精神の傾向を覗いてみることにする。

Heinrich von Ofterdingen は主人公の Heinrich が彼の両親の家で青い花を夢み、この夢を実現して行く Erwartung (期待) を名付けられた第一部と、Erfüllung (実現) と名付けられた第二部とから成立つている Roman である。しかし第二部に於て、青い花が見出される筈であつたが、作者 Novalis (Friedrich von Hardenberg) のその短い生涯 (1772-1801) と共に、未究の断篇として残された第二部の前半と彼の覚え書とによつて吾々はその結末はおぼろげに覗いしることが出来るに過ぎない。

Heinrich は夢を実現するのであるが、同時に彼の内心の成長がこの夢によつて發展せしめられるのである。即ち彼が成長し發展した時、その原動力となつた夢の世界に現実として永久に立ちうるのである。… denn ich fühle es, daß er (der Traum) in meine (Heinrich) Seele wie ein weites Rad hineingreift, und sie in mächtigem Schwunge fortreibt. と述べているのは、夢が悟性によつて割り切り得ない精神の力を暗示しているのであり、単なる Novalis の偶然の思いつきに依つて、夢をもちだしたのではなくて、この夢の中の精神の自由な飛翔に、無味乾燥な悟性につながれた文学を解き放つて、単なる自然の模倣ではなくて、詩人の豊かな想像力の創造物、現実でなく、詩であろうとするに相応しい領域であつたからである。この Leitmotiv は数多くの挿話や未来の世界を貫ぬいて、未完に終つた第二部に到つて実現するのである。例えば、Ist mir zu Mute wie in jenem Traum beim Anblick der blauen

* 独逸語研究室

Blumen? Welcher sonderbare Zusammenhang ist zwischen Mathilde und dieser Blume? と愛人 Mathilde と出会つたあとで Heinrich の言う言葉、亦、彼が隠者の窟で見た本に、彼は夢に現われた人々を見るのであるし、これらのことを Die Blume seines Herzens ließ sich zuweilen, wie ein Wetterleuchten in ihm sehen と記している。更に Notizen の中には Alles blaue in meinem Buche の文字が見えるし Tieck はこの Roman の続篇に關する報告に Immer sollte das Buch unter den verschiedensten Begebenheiten denselben Farbencharakter behalten, und an die blaue Blume erinnern. ……と報告している。

Novalis が現実そのものよりもより高い眞実内容の文学を意図し、第二部に実現しようとした詩の国を、これらの夢が予感を興えているのである。この未来の国を啓示する文学を支えている Novalis の世界観に触れなければならない。

彼は吾々の肉体は吾々の精神と鋭く対立するものではあるが、精神は肉体を支配し、外界(自然)は心靈の支配下におかれるようになった時、Alles Unwillkürliche soll in ein Willkürliches verwandelt werden. と主張するのである。これらのことを彼の Fragmente について、二三の引用をすれば Unser Körper soll willkürlich, unsre Seele organisch werden. と、肉体が意の儘になる境地を Wir haben zwei Systeme von Sinnen, die, so verschieden sie auch erscheinen, doch auf das innigste miteinander verwebt sind. — Ein System heißt der Körper, eins die Seele ……Kurz, beide Welten, sowie beide Systeme sollen eine freie Harmonie, keine Disharmonie oder Monotonie bilden. Der Übergang von Monotonie zur Harmonie wird freilich durch Disharmonie gehn und nur am Ende wird eine Harmonie entstehn. In der Periode der Magie dient der Körper der Seele oder der Geister = welt ……として、Magie の時代に到つて肉体が精神に奉仕するのであつて、彼は更に Der physische Magus weiß die Natur zu beleben und

willkürlich, wie seinen Leib, zu behandeln. の如く望むのである。この Magie とは Magie ist =Kunst, die Sinnenwelt willkürlich zu gebrauchen. と説明される技術であり、この状態は Of-terdingen の結末に於いて舒べられる筈であつた。この思想を Novalis 自身も magische Idealismus と名付けているのであるが、Magie の状態は Die Vermählung der Jahrzeiten と題名のついた彼の計画に残された断片詩には Heinrich が太陽の国を破壊し、思いの儘に晝と夜を結びつけ、春と秋、夏と冬、しかも青年と老年、過去と未来迄結びつけることを歌つている。このような Magie の力を彼はどのように説明しようとしているか。Fragmente の中で…Wir sind gar nicht Ich— wir können und sollen aber Ich werden. Wir sind Keime zum Ich=werden. と述べて、意識的に経験する我、現実的な我に対して、より高級な我 (das höhere Ich), 観念我を設定し、それになりうる萌芽を吾々は内に藏しているのだと主張し、従つて…denn unser sogenanntes Ich ist nicht unser wahres Ich, sondern nur sein Abglanz. と考えるのである。das höhere Ich の自覚に到した時、世界(=自然)を精神と調和統一することが可能となり Blumen und Tiere sprechen über den Menschen とする Gemüt の世界が顯われる。この点を Es ist höchst begreiflich, warum am Ende alles Poesie wird. Wird nicht die Welt am Ende Gemüt? として、Welt は Gemüt と本来一つのものであり、この Gemüt に到る途は Liebe (愛) であり、Gemüt に於いて、人間の如く Seele と感覚をもつ自然と合一する。かくの如く一切の外的現実を吾々の内から除き、詩的哲学的体系を提起する Novalis は、Der Poet versteht die Natur besser wie der wissenschaftliche Kopf. と強く言う時、人生の散文に対する抗議であると共に、物それ自体を不可解とする Kant の表明を、悟性的に把握された感覚界は現象の表面をなでまわす以上に出ないことへの指標として受けとり、悟性を閉め出し Phantasia の力によつて、詩(Poesie)の翼にのり

かけり行く Magische Idealismus への確信を深めるのである。

Phantasie の自由放奔に活動しうる領域 — 地上の、現実の如何なる法則、如何なる関聯からも解放された Magie の領域 — 一切の世界がその像を、一切の秘密が打明けられるのであるが、これらを啓示すべき文学の形式として、Märchen を最高のものとして考えるのである。Das Märchen ist gleichsam der Kanon der Poesie — alles Poetische muß märchenhaft sein. と彼は Fragmente に述べているのである。Märchen の世界にあつては、自然も人間も並列するのであつて、我が das höhere Ich の反映に過ぎない如く、自然の現実的姿も、真の自然の反映にすぎない。この真の自然と合一した Magie の状態は、即ち das höhere Ich に外ならない。このような状態を啓示すべき文学として Märchen が文学の規準として挙げられたのは当然であろう。

文学が観念の表現であるとする彼にとつて、現実を単に模倣する散文的なものを極力排除して Poesie を実現することが一切であつた。従つて、ゲーテの Wilhelm Meister が日常の散文の世界を取扱つていることに対して、彼は Ofterdingen を以つて之に相對し、之に答えようとしたのである。

この中で、従つて、夢の世界が取扱われるのは、悟性を超越した詩的現実を表現する適切な材料であり、しかも夢の世界そのものの描写は、Poesie への橋として、悟性的な現実的な一切の關聯から自由である類似性の故に重要であり、こゝでは単に未来の、実現すべき世界への予感があるだけに過ぎないが、Der Traum ist oft bedeutend und prophetisch ……であつて、Der Traum belehrt uns auf eine merkwürdige Weise von der Leichtigkeit unserer Seele in jedes Objekt einzudringen, — sich in jedes sogleich zu verwandeln. かくの如き夢に於いて予感的に示めされる精神の怪易性は — Ofterdingen の結末における Gemüt の世界、時と場所の區別を止揚し、死んだ対象が動き、動物が物を言う詩的現実が可能

となることを示すのである。睡眠中には単に無意識に支配しているのに反して Gemüt の世界に於いては目醒めていて夢をみうる力を精神は持ちうると、考えるのである。従つて Ein Märchen ist eigentlich wie ein Traumbild — ohne Zusammenhang — Ein Ensemble wunderbarer Dinge und Begebenheiten — die Natur selbst とする不可思議な事物や事件が調和する、自然そのものとの合一の状態は、単なる夢と Märchen に啓示されたあの Gemüt の世界 — Magie の時代と言つてもいいが — は、構造の相違ではなくて、人間的段階の相違である。Ofterdingen に於いても Heinrich は青い花においては未来を予見するに過ぎない段階の人間である。Heinrich は成長し、未来の世界 (Roman 第二部) に到つて、彼の精神は、相互に何ら行爲し合えぬものを關聯づけることの出来る Assoziationssubstanz となり、何物へも浸透しうる故に unser Geist ist ein Verbindungsglied des völlig Ungleichen となりうるのである。Novalis は覚え書では、Menschen, Tiere, Pflanzen, Stein und Gestirne, Flammen, Töne, Farben müssen hinter zusammen, wie e i n e Familie oder Gsellschaft, wie in Geschlecht handeln und sprechen. と述べている。従つて Heinrich が太陽の国を破壊し、とか、夜と晝をならべる、如きは正に Assoziationssubstanz となることである。Assoziation が行われる世界を吾々は夢の中に予感する。夢の未来の世界との親近性の故に Märchen と共に、夢は人間に対して、これらのものへの啓示を興えることが出来る。又先にも述べた如く Ein Ensemble wunderbarer Dinge und Begebenheiten として Assoziation の主体となりうる精神の状態は、„ohne Zusammenhang, jedoch mit Assoziation, wie Träume.“ と、夢と未来の世界 = Märchen は細部に到る迄一致しているのである。従つて彼は、単に Heinrich だけでなく、この世界の目的も、この夢の予感の実現である Poesie の世界であると考へているのである。第二部冒頭の Astralis の詩には、

Die Welt wird Traum, der Traum wird Welt
Und was man glaubt, es sei geschehen,
と歌い, Fragmente では, Unser Leben ist kein
Traum—aber es soll und wird vielleicht einer
werden. と記している。

しかし Heinrich が夢からさめたところは彼の
両親の家であるように, 夢の中では決してそのよ
うなことが現実にはおこらない。が, Die Welt
wird Traum, der Traum wird Welt. 即ち現
実は精神となり精神に於て可能なことは現実的と
なるのである。Die Poesie ist das echte Reelle.
Je poetischer, je wahrer. とする時, 彼の世界
が完成するのである。

こゝで彼が Traum と言う時, 単なる夢は, 未
来の世界を予示するに過ぎない形式であつて, …
…Karikatur einer wunderbaren Zukunft に過ぎ
ない。彼が Fragmente の中に述べている夢に就い
ての彼の考えと, 小説の中に表われる夢との間
に, いさゝかの徑庭を感じる。即ち, die Freiheit
des Geistes と das Prinzip der Assoziation を
特色とする夢が如何にしてその内容を充実しうる
か。彼は Heinrich が詩人として成長するにつれ
て, 漸次, この夢がもつ事象の裏がわにこめられた
深い意味を感じ得ることを暗示している。このこ
とは童話についても同様であるが, 作中の Klings-
ohr は詩人として完成しているが故にすでに彼に
おいては一切の Poesie が実現しているのであり
Heinrich も又, 未来の世界を実現しうるのであ
る。

夢がそのうらがわに深い意味をこめることは,
それ自身矛盾である。しかし, 夢をみている状態
が, 眞の自我を自覚した Magie の状態と形式に
於いて相似しているごとく, 時に精神の内部の眞
の自我一物の本体を, わずかな隙間を洩る光の如
くのぞかせることがありうる。このような光を含
んだ夢を彼は der höhere Traum と呼んでいる。
そしてこの二つの好例をロマンの中に拾つてみる
と Ist nicht jeder, auch der verworeenste Tra-
um, eine sonderliche Erscheinung, die auch
ohne noch an göttliche Schickung dabei zu

denken, ein bedeutsamer Riß in den geheimnis-
vollen Vorhang ist, der mit tausend Falten in
unser Inneres hereinfällt? と Heinrich の言葉は
更に…Mich denkt der Traum ein Schutzwehr
gegen die Regelmäßigkeit und Gewöhnlichkeit
des Lebens, eine freie Erholung der gebundenen
Phantasie, wo sie alle Bilder des Lebens durch-
einanderwirft, und die beständige Ernsthaftig-
keit des Erwachsenen Menschen durch ein
fröhliches Kinderspiel unterbricht. (Novalis sch-
riften hrsg. v. P. Kluckhohn Bd. I. S. 104—105)
…ohne allen Sinn und Zusammenhang と En-
semble wunderbarer Dinge und Begebenheiten
を特徴とする Märchen がより深い意味と関連性
を持つことについて, Novalis は höheres Mär-
chen と言う概念を用い, Ein höheres Märchen
wird es, wenn ohne den Geist des Märchens
zu verscheuen irgend ein Verstand(Zusammen-
hang, Bedeutung etc.) hineingebracht wird.
Sogar nützlich könnte vielleicht ein Märchen
werden と Fragmente の中で述べているが, こ
れは正に Nichts ist mehr gegen den Geist des
Märchens, als ein moralisches Fatum, ein
gesetzlicher Zusammenhang に矛盾するのである
が, 彼は ohne den Geist des Märchens zu ver-
scheuen とつけ加えているし, könnte vielleicht
とことわつている。

Märchen は一切の意味も関連もない混沌を写
さなければならぬ。何故ならば, 自然そのもの
が内在的にもつ秩序とその発展とは, 現実の世界
悟性によつては解くことのできない像であろう。
この世界像を解明し理解するためには精神の眼が
必要であり, 詩化された世界像の理念が詩人の
Phantasie を通じて, 創り出されねばならぬ。
このような理念は, 夢における諸々の形象に相対
し, その内容を予示するものであり, Klingsohr=
Märchen は, この意味で Ofterdingen の結末
であり, 青い花の夢の世界が, Heinrich の前に,
詩的現実として展開し, Heinrich の詩人として
の彼の Gemüt の完成を示すものであり, かくし

て第二部に移り行くのである。

第二部においては、かくの如くして das höhere Traum に予示された世界が実現するのである。

Ofterdingen を通じて、Leitmotiv となつている夢は Novalis の世界観の詩的表現であり、Romantik の Grundidee の端的な表現である。… Er wanderte über Meer mit unbegreiflicher Leichtigkeit. とか Die Flut schien eine Auflö- sung reizender Mädchen, die an dem Junglinge sich augenblicklich verkörperten. と言うような夢の描写は、しかし乍ら、現実の束縛を放たれた自由に飛翔する精神の軽易性、一切の相連関し得ない事象に自由に入り込みうる Assoziation の力を見事に示すものであるにしても、かくの如き傾向が、何らの抑制もない個人の主観の放恣な展開であり、この無限への Phantasie を超えた空想の翼は、何処にも安定を見出し得ない、満されざる無力感とならざるを得ず（正に romantische Ironie でなくてなんであろう。）後年浪漫派の詩人達がルネッサンスによつて取戻したものまでも棄てざるを得なくなつた自己崩壊の芽をこゝに感ずるのである。

Er fand sich auf einem weichen Rasen am Rande einer Quelle, … と突然に Heinrich が青い花の国に身を置き, was ihn aber mit voller Macht anzog, war eine hohe lichtblaue Blume … と Heinrich は迷うことなく数多くの花の中から何か大きな力に惹かれて青い花に近づくのである。

このような夢に脈絡や連関を追つてはならない。脈絡や連関は、正に悟性の支配であり低次の Das Ich の——散文的解釈がもたらす自然に外ならない。夢幻の内に予感するもの——総合された精神と世界像の形而上学的な生がある。そして、この生は、到り得ない無限の彼方に、予感し追い求めるところに、この不安に心を駆り立てる憧憬は、中世の壯麗な混沌と統一へ行きつくのである。

(1952, 9, 5,)

Literatur

- Novalis Schriften, hrsg. von Paul Kluckhohn. 1928
 Dilthey, W. : Das Erlebnis und die Dichtung 1922
 Korff, A. : Das Wesen der Romantik (Ein Vortrag) 1929
 Obernauer, K. J. : H. Iderlin und Novalis 1925
 Brandes : Die romantische Schule in Deutschland